

巻 頭 言

茨城県立医療大学紀要 第24巻

学長 永 田 博 司

かつて学術雑誌の優劣を決めるのは“PQRS”と呼ばれる4つの要素と言われていました。査読制度 (Peer review) が機能しているか、投稿・掲載される論文の品質 (Quality) が担保されているか、投稿から出版までが迅速 (Rapid) であるか、購読数 (Subscription) が大きく多くの研究者に読まれているかという4要素です。しかし、昨今の電子ジャーナルの普及によって大きく状況が異なってきました。電子化されたことにより、発行部数という概念がなくなり、印刷媒体制作というプロセスは短縮され、必然的に迅速化されています。一方で、当然ながら査読制度 (P) と論文品質 (Q) については、依然、重要な要素として残っているはずですが、電子ジャーナル (特にオープンアクセスジャーナル、以下OAJ) の査読制度の質については、大きな問題を抱えていると言われていました。そのことが明らかになったのは、2013年に米科学雑誌Science誌上に発表された興味深い調査研究がきっかけです (John Bohannon: Who's Afraid of Peer Review?, Science 342:60-65,2013)。巧妙なおとり捜査にも似た手法で、OAJの査読がいい加減であるかをあぶり出した調査です。Bohannonは誰が見てもあり得ない結論を導き出した化学領域の架空の“ファクト”を内容とする論文を (敢えてnativeらしからぬ英語で書くという手の混んだ方法も駆使して) 作成し、OAJの304誌に投稿したところ、なんと157ものOAJで採択されました (当然、採択通知を受け取った後、その投稿論文を取り下げています)。つまり、まともな査読をしていないジャーナルが半数以上、存在したということになります。この中には日本の某国立大学医学部発行の英文紀要も含まれており、その雑誌は当然ながら学術雑誌としての評価を著しく落とすこととなりました。

しっかりとした査読制度を維持することはまさに学術雑誌の命です。本紀要は図書研究委員会の委員が編集者となり、学内の数多くの教員によって時間をかけてピア・レビューが行われています。査読者は著者に対して複数回の改定を求めるケースも少なくはありません。迅速性 (R) や購読数 (S) は決して自慢できるものではないかもしれませんが、査読制度 (P) と、それに裏付けられた一定の論文品質 (Q) については、従来の学術雑誌に求められてきた要件を満たしているはずですが、